

城端蒔絵450年記念 十六代 小原治五右衛門 展

治五右衛門 News Letter Vol.21

ごあいさつ



城端蒔絵450年記念 十六代 小原治五右衛門 展

OHARA Jigoemon XVI

2025年12月17日(水)～12月22日(月)

午前10時・午後7時〔最終日午後5時終了〕
日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

城端蒔絵は、安土桃山時代・天正三年(1575)に始まり、450年の節目を迎えました。その源流は天平の密陀絵の再現にはじまり、それに基づき白蒔絵法を編み出し、さらに各代の創意工夫を加えながら、小原家一子相伝で継承しております。歴代の治五右衛門は、漆藝のみならず、日本画、彫刻、和歌、俳諧、医学、蘭学、天文学、暦象、測量など幅広い分野に学び、城端神明宮春季大祭で巡行する曳山や庵屋台などの制作や修復にも携わり、城端の町の歴史や文化と深く結びつきながらあゆんでまいりました。自然や人やものを大切にする精神、助け合う心、生まれ育った土地に対する信頼と感謝、城端人として生きる誇りの結晶として「城端曳山祭」も300年続いております。

本展では、八代 治五右衛門が天文学や蘭学にも通じたその探究心に着想を得て、日食・月食をモチーフに制作した「Eclipse」シリーズを中心に展示いたします。光の移ろいの中に、“大事なことは変わらずに変わり続ける”という、これまでの感謝と未来への希望を重ね、城端蒔絵の変容と深化を表現しました。
ご高覧いただければ幸甚に存じます。

十六代 小原治五右衛門

Greeting

Jōhana maki-e originated in the Azuchi-Momoyama period, in the third year of Tenshō (1575), and this year marks its 450th anniversary. Its origin lies in the recreation of Mitsuda-e from the Tenpyō era, from which the white maki-e technique was developed. Since then, each successive generation of the OHARA family has inherited and refined the craft, passing it down through a single hereditary line.

Successive generations of Jigōemon devoted themselves not only to lacquer art, but also to a wide range of disciplines—Japanese painting, sculpture, poetry, haikai, medicine, rangaku (Western learning), astronomy, calendrical studies, and surveying. They were also engaged in the creation and restoration of the hikiyama and iori-yatai floats used in the spring festival of Jōhana Shinmei-gū Shrine, while staying connected to the history and culture of their hometown. The spirit of cherishing nature, people, and the countless things that enrich our lives; the heart of mutual support; and a deep trust and gratitude toward the land where we were born and raised—all these have been handed down as the pride of the people of Jōhana. The Jōhana Hikiyama Festival, which has continued for over 300 years, stands as a living testament to that spirit.

In this exhibition, inspired by the intellectual curiosity of the eighth-generation Jigōemon—who was versed in astronomy and Western studies—I present my recent Eclipse series, which takes solar and lunar eclipses as its motif. Through the transitions of light, I seek to express the transformation and deepening of Jōhana maki-e—its essence of “continuing to change while remaining true to what is essential,” as an expression of gratitude to the past and hope for the future.

It would be my great honor if you would take this opportunity to view the exhibition.

OHARA Jigoemon XVI



十六代 小原治五右衛門《城端蒔絵飾箱「Eclipse」》

第71回 日本伝統工芸展 日本工芸会新人賞

OHARA Jigoemon XVI (b. 1979)

Eclipse, 2024

Coffer; Jöhana Maki-e

h. 3 47/64 x w. 9 17/32 x d. 9 17/32 in (9.5 x 24.2 x 24.2 cm)

「Eclipse」と題した今回の作品は、甲面に日食、見込みに月食、側面には光によって映し出される水面を配し、甲面と側面をポジとネガに分けることで、金と銀による陰と陽、黒は白を引き立て、白もまた黒を引き立て、漆黒の深みは委ねることで空となり水にもなります。Eclipseをテーマに、大事なことは変わらずに変わり続ける、城端蒔絵の変容と深化を表現しました。

The work titled "Eclipse" features a solar eclipse on its top surface, a lunar eclipse on its base, and light reflection on water on its lateral surface. By dividing the top and the sides into positive and negative, we can see the yin and yang of gold and silver, black and white enhancing each other, and the depth of jet black becomes both sky and water as the viewer is immersed in the imagery. Using the theme of Eclipse, the transformation and deepening of Johana maki-e is depicted, expressing the idea that important things remain the same but also continue to evolve.



十六代 小原治五右衛門《城端蒔絵飾箱「Eclipse II」》

第64回 日本伝統工芸富山展 日本工芸会賞

OHARA Jigoemon XVI (b. 1979)

Eclipse II, 2025

Coffer; Jöhana Maki-e

h. 4 17/32 x w. 9 7/8 x d. 9 7/8 in (11.5 x 25.1 x 25.1 cm)

『Eclipse II』は、天文現象の「食（しょく）」をテーマに制作したシリーズの第2作です。八角形の箱の蓋には日食を、器の底には月食を描き、対となるふたつの現象をひとつの器に収めました。漆黒に仕上げた甲面は宇宙空間そのものを象徴しており、見る人それぞれが、自らの未来や内なる宇宙を自由に投影して感じていただけるよう願いを込めています。

"Eclipse II" is the second piece that I made under the theme of the astronomical phenomenon, "eclipse". I drew the solar eclipse on the lid of the octagonal box and the lunar eclipse at the bottom of the vessel, so that the two different phenomena could be seen in one box. The top of the box finished in jet black symbolizes outer space itself. I made this piece hoping that those who see this would project their future or the universe within themselves freely onto this piece.

城端蒔絵450年記念

十六代 小原治五右衛門 展

会期：2025年12月17日(水)～12月22日(月)

時間：午前10時 - 午後7時 [最終日午後5時終了]

会場：日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

〒103-8001 東京都中央区日本橋室町1-4-1

電話：03-3241-3311 (大代表)

https://www.mistore.jp/store/nihombashi/shops/art/art/shopnews_list/shopnews0821.html

■ 作品解説 - 十六代 小原治五右衛門

日 時：2025年12月17日(水) 午後2時～

会 場：日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

参加費：無料

※事前予約等は不要です。

お時間までに、会場にお集まりください。

■ 関連行事

日本橋三越本店×日本橋とやま館 特別トーク＆交流イベント

城端蒔絵450年記念 十六代 小原治五右衛門

～城端の伝統と未来～

日 時：2025年12月17日(水) 午後6時～午後7時30分

会 場：日本橋とやま館 バーラウンジ「トヤマバー」

東京都中央区日本橋室町1-2-6 日本橋大栄ビル1F

参加費：3,000円

定 員：30名

登 壇：城端蒔絵 十六代 小原治五右衛門

日本橋三越本店 美術担当 平岡智 氏

主 催：日本橋とやま館

【参加申し込み】

日本橋とやま館

<https://toyamakan.jp>

TEL 03-6262-2723



富山県板金工業組合青年部50周年記念式典・祝賀会にお招きいただき、記念講演の機会を賜りました。関係者の皆様には、心より御礼申し上げます。当日は「過去に学び、今を生き、未来へ繋ぐ」を演題として、これまでの歩みの中で受け継いできた技と心、そして現代を生きる私たちが世代を超えて何を紡いでいくべきかについてお話をしました。創立50周年という大きな節目に立ち会えたことを大変光栄に存じますとともに、今後のさらなる発展へと繋がっていくことを願っております。ありがとうございました。



今年も青井中美展の彫刻・工芸部門の審査員を務めました。県内41校から452点もの作品が寄せられ、絵画・彫刻・工芸・デザインの各分野から253点が入選・入賞となりました。青井大賞には、木戸朱那さんの「自分らしさ」(絵画部門)が選ばれました。人物の質感表現や構図も中学生とは思えない完成度を感じさせる秀作でした。彫刻・工芸部門においても、素材の特性を活かした意欲的な挑戦が多く、今後の展開が楽しみです。入賞・入選された皆さん、おめでとうございます。<https://www.kogeih.tym.ed.jp/archives/>



『第72回 日本伝統工芸展 松江展』が島根県立美術館で12月3日(水)から24日(水)まで開催されます。

城端蒔絵蓋物「Prominence」も展示されますので、ご高覧いただければ幸いです。

- [松江展] 島根県立美術館 2025年12月3日(水) - 24日(水)
- [高松展] 香川県立ミュージアム 2026年1月2日(金) - 8日(日)
- [広島展] 広島県立美術館 2026年2月18日(水) - 3月8日(日)

《終了》

- [東京展] 日本橋三越本店 2025年9月3日(水) - 15日(月)
 - [金沢展] 石川県立美術館 2025年10月31日(金) - 11月9日(日)
- <https://www.nihonkogeikai.or.jp/>



十六代 小原治五右衛門《城端蒔絵蓋物「Prominence」》

伝統に息吹を与える魂 十六代 小原治五右衛門の美と技の「現在」

日本には、時代を超えて受け継がれる「匠の系譜」がある。十六代 小原治五右衛門は、その系譜の先頭に立ち、今この瞬間も伝統の器に新たな生命を注いでいる。彼の手によって生まれる漆芸は、単なる技の継承ではなく、時代と呼応する芸術として人々を魅了する。

古典と現代、形式と自由。その相反する稜線を軽やかに越えながら、そのたおやかな仕事で“未来の伝統”を紡ぎ出している。

十六代を襲名し、先祖が積み重ねてきた技と精神に深い敬意を払う治五右衛門。ただ古典を守るだけでは満足しない彼は、はつきりとう言つた。

「受け継ぐとは、進化させることだ」と。

その信念のもと、独自の感性と構想力で新たな表現領域を切り拓いている。当代・治五右衛門の作品には、共通して「静寂の中に宿る力」がある。漆黒の奥に潜む微光、金鉛のきらめき、呼吸するような白蒔絵の繊細さ。それらが調和する蒔絵は、単なる物ではない。魂を宿し、時空を超える。

代表作の一つ、城端蒔絵飾箱《曙光 - Python》は、その象徴だ。

哲学者ニーチェの言葉「脱皮できない蛇は滅びる」にインスピレーションを受け、脱皮と深化を和光銀と金蒔絵で表現している。極限まで突き詰めたその表現の中には、無限の宇宙を感じさせる。

治五右衛門の作品は、“見えないものを見せる”力を持ち、だからこそ海外のアーティストやデザイナーをも驚かせた。ニューヨークや香港の展覧会では、彼の作品が「日本の魂」「未来のデザイン」として喝采を浴びた。日本人が持つ精神性と、素材の深みが国境を越えて人々の心を動かしたのだ。

根底にあるのは、揺るぎない「自然への畏敬」だ。

漆という素材は、人の営みとともにあった。彼はその樹液の一滴一滴に宿る生命の鼓動を聴き制作する。華美を求めず、誇張をせず、自然と対話するように生まれる造形には、現代人が忘れかけた「共生の哲学」が息づいている。一本の筆の動きと彼の呼吸が呼応する。一つ一つの工程が、祈りにも似た真摯さとなって貫かれていく。

十六代 小原治五右衛門の仕事は、日本文化の精髓そのものである。見る者は彼の作品の前で思わず立ち止まり、自らの内にある“美の原点”と向き合うことになる。

伝統と革新、技と心、自然と人間。それらすべてを一つに融かしながら、静かに、しかし確かな歩みを進める十六代 小原治五右衛門。

令和の時代に、治五右衛門のような存在に出会えたことの幸運を、私は思う。彼がたどった道程は、なんと遙かなことであったろう。

それを想像すると、作品ばかりか、孤独と向き合うその創作の一挙手一投足にこそ、憧憬が募るのである。



作家
小松 成美 / KOMATSU Narumi

神奈川県横浜市生まれ。広告会社、放送局勤務などを経たのち、作家に転身。生涯を賭けて情熱を注ぐ「使命ある仕事」と信じ、1990年より本格的な執筆活動を開始する。真摯な取材、磨き抜かれた文章には定評があり、多くの人物ルポルタージュ、スポーツノンフィクション、インタビュー、エッセイ・コラム、小説を執筆。主な作品に『アストリット・キルヒヘア ピートルズが愛した女』『中田語録』『中田英寿 鼓動』『中田英寿 誇り』『イチロー・オン・イチロー』『和を継ぐものたち』『トップアスリート』『勘三郎、荒ぶる』『YOSHIKI/佳樹』『なぜあの時あきらめなかつたのか』『横綱白鵬試練の山を越えてはるかかる頂へ』『全身女優 森光子』『仁左衛門恋し』『熱狂宣言』『五郎丸日記』『それってキセキ GReeeeN の物語』『虹色のチョーク』『M 愛すべき人がいて』『熱狂宣言2 コロナ激闘編』『奇跡の椅子 Apple がHIROSHIMAに出会った日』『THE COACHS すごい会議ストーリー』など多数。高知県観光特使、テレビ朝日番組審議委員を務める。

日本文藝家協会会員

<https://komatsu-narumi.com>



OHARA Jigoemon XVI

- Johana Makie -

令和7年(2025)

【活動報告】

- 11月1日(土) 富山県板金工業組合青年部50周年記念式典・記念講演
- 11月6日(木) 令和7年度 小学校教育課程研究集会 | 学校評議員
- 11月13日(木) 十六代 小原治五右衛門 番組収録
- 11月14日(金) 第32回 青井中美展 表彰式
- 11月19日(水) 十六代 小原治五右衛門 番組収録
- 11月27日(木) 城端曳山等修理事業 調査
- 11月30日(日) 日本工芸会富山支部 役員会

令和6年度能登半島地震・大雨被害で被災された

皆様に心よりお見舞い申し上げます。

被災地ではまだ不安な日々をお過ごしの事と拝察いたします。

1日も早い安心の暮らしの蘇りに結ばれますよう祈念いたします。

〒939-1865 富山県南砺市城端4316-1

Tel / Fax: 0763-62-1156

E-mail: info@jigoemon.com



<https://www.jigoemon.com>